經驗醫療手引艸

アサキユメミシ

六

十武9
435
6

唐李嶠詠物詩　日月風雲土地文寶金銀珠玉ヨリスベテ器戯木竹草花生類ニ至ル迄ノ詠物ノ詩　全

唐詩白圭　唐詩選訓解等拾遺　李于鱗　全

東郊文集　詩文尺牘　全五冊
徂徠先生閲○則序跋徂徠草書

潮山詩集　全
南郭先生閲　長門瀧弥八ノ詩

蘆隠稿　南郭先生閲　詩文尺牘　全

唐翁詩集　伊藤長胤閲　全二冊

唐詩聯選　唐五言七言對聯ヲ集ム　全二冊

梅花百詠　全

蘭齋遺稿　島山氏輯　全五冊

蘭齋一日百首詩稿　全

陳騤文則　徂來先生校　全
六經老莊孟荀ノ書ヲ考　文ヲ作ルノ法ヲ著ス其時諸儒下筆語天下妙也雖與日月爭光可也贊セシ程ノコトニテ此書ヲ諭ハ能文作ル人トナルベシ

詩法掌龍　詩作便要ノ書　全五冊

文章雋語　桐江先生著○五經及左傳之語ヲ悉ク拔萃メスベテ國字分ニシ出所ヲアラハス

詩文書品

武ヤ門 43 5 6

あさゆめみし　六目録

あの部

○凍裂　あかぎれ　十七丁メヲ
○同　ありぎれ　おやけ　ひびよし　同
○同　同ウ
○赤くされ　あかくされ　同
○阿伽陀圓　あかだえん　同
○穴痔の薬　あなぢ　十八丁メヲ

○同　同
○穴くさの薬　同
○同　同
○同　一九丁メヲ
○悪瘡の薬　同
○無瘡爛治し難きよ妙薬　同
○同爛れ治し兼るよ付薬　同
○あざ瘢風の妙薬　二十丁メヲ

○あざぬき薬　大ニ妙なり　同
○中暑よて忽地よ仆絶死ヒとすると治す　同
さの部
○產前產後血誣百ニよ　同ウ
○產前產後一切の病を治す　九二丁メヲ
よ負ふ身よりよ
中一氣付なりよ
○高山振薬　產後よ負ふ身ニよ　同ウ
○產前催生よ薬　九三丁メウ

○同 極秘 同
○同 九三丁メヲ
○産前後并ニ一切の金瘡打撲ヨ用方 同
○魚疽病 つくりやとの事 同
○同瘡乾咽するを治する方 九四丁メヲ
○懐妊月数ヲ海りて六月より用方 同
○懐妊口を禁ずるを慎ずるを治す 同ウ
出熱あり中風ヨ似く中風ヨあらざるを治す

○新産 産のけつきてまがつり遅ヨ 同
○腰腰久痛遅く生るを治す 九五丁メ
○難産の妙薬 同
○同 同
○難産奇治 同ウ
○難産ヨ治法 同
○横産 九六丁メヲ
○横産逆ヨて生れ難きヨ用方 同

○名方産前産後黑薬　九六丁メヲ
○難産ハ薬　九七丁メウ
○産後前陰痛を止る方　同
○産前悪く毒薬を服し胎動き嘔吐血下るを治する方　九八丁メヲ
○産前小便ちがげきを止る方　同
○産後血暈を治す　同
○産前後より負接骨何きもの　同ウ

○産前後感冒以痛霍乱其外
の知ざる病を用る方　同
○壺中黑神散　九九丁メヲ
○産後胞衣下ざるを用る方　同
○同　同
○産後悪血多く下るを又折撲金瘡
血止よ妙なり　同
○産後児枕痛を治す　四丁メヲ

○産後振業　産後より血多く出て氣を労ゝはしより産後よりすくみふるへよはし
少身又ハ高きところより落るよし　同

○産後の氣付　四十メヲ

○同血征氣付　同

○胞衣下ざるよ妙薬　四二丁メヲ

○産後陰破れ腸出るを治す　同

○産後弘膨痛よ妙薬　同

○産後産労頭痛眩暈不食氣虚

○産後の諸病よ用る寄方　同

○産後より乱氣しるを治す　四三丁メヲ

○産後水腫治方　同

○産後脹滿治方　同ウ

○産後脉散乱眼を見かへし面まくく
身體冷しるを治す　四三丁メヲ

○産後より種こ悪症ありて譫言寒熱
性來戦慄面色或ハまくく或ハ赤

くなり色こよ変するを治す　同
○産後小便費えんす出るを治す　四丁メ
○産後大便結するを治す　同
○産後頻よ池溺を治す　同
○産後子腸出こく治らざるを治す　五丁ウラ
○産後玉門傷痛を治す　同
○婦人一切の血証　同
○腹中よて子死るよ　同

○産月を延す　同
○ざくろ出れ　同　丁メ
○山椒よむせるを治す　同
○酒の醉を醒す　同
○同　同
○砂糖蜜を煉法　五丁メ
○同　同
○同目利の事　同

○同上製煉やう　八十八丁メヲ
○同上こ製煉やう　同
○又法　同

〈きの部〉

○氣付　同ウ
○同　神氣散　九十九丁メヲ
○同　玉寶丹　同ヲ
○同　金瘡目運　ちりけあるよ用てめなり　同ウ

○同　秘方今川赤蕀　同
○同　方　四十丁メヲ
○灸のあと久く愈ざるを治す　同ウ
○灸の愈かぬるよ妙薬　同
○灸并膓拍愈薬　四十一丁メヲ
○灸の火骨へ通ずるを治す　同
○灸あつゝぬ法　同
○灸ル愈薬ふるを治す　同ウ

○同　を弃なをぬる瘉　同
○灸のかとつゝぬる法　同
○灸代　膏月藥　同
○疵膏物愈藥　四十二ノメ
○疵瘉藥妙方　同
○同　同ウ
○一切疵の痛を去　同
○薄色れ方　きつくすり血止引藥　同

○疵癰付藥　四十三ノメ
○万氣散　さゞ口藥　同ウ
○疵洗藥　同
○卒家黄藥　四十四ノメ
○切疵より出れとゝきるを治す　同
○疵の出をとらる藥　同
○疵より出るゝきるを消藥　同ウ
○廣さ疵縮ひやう　同

○切疵あまたあくこりくを治す同
くろをれとりて。上の皮ハ切ずして骨折
事あるを治す　ふの前ゝも一方あり　四十五丁メヲ
○同　同ウ
○疵を早く癒す薬　同
○疵。肉上薬　同
○疵并ニ膣拙れぬ薬　四十六丁メ
○疵癒く後言きを事なする薬　同
○疵口付薬　同
○疵廻り熱あるを治す　四十七丁メヲ
○疵を門より癒す薬　同
○疵百病丸　同
○疵早く癒す薬　同ウ
○疵癒れ薬　二方　同
○疵の膣痛を治す　四十八丁メヲ
○同熱よて痛を治す　同

○金瘡歩撲 并ニ粗氣ヨ用る薬 同
○氣上里粗亂するヨ用薬 同ウ
○木竹身ヨ立を拔薬 内薬 四十九丁メラ
○同付薬 二方 同
○氣鬱し食つゝへるを治す 婦人の病ヨむはし 同ウ
○きれくさゝの薬 二方 同
○大人小児ともヨ陰嚢大なるを治す 五十丁メヲ
○氣膣 并ニ屁ぐす。其外久き膣泡を

治す
○虚損を治す 同
ゆの部 五十丁メヲ
○夢ヨ精を洩すを治す 同ウ
めの部
○血眼洗薬 同
○目洗ひ薬 五十一丁メ
○同 同

○目洗薬　風眼やに目血眼よよし　同

○同　五十三丁メヲ

○目薬の方　さしくすり丸方　同

○冷目の薬　仏光眼よよし　五十四丁ウ

○眼目丸内薬　冷目　或ハ血のみち眼よよし　同

○明眼地黄湯　五十五丁メヲ

○目の内薬　二方　同

○目へ物の生ずるをぬく薬　目へ物の入るを出すより智恵海にあり　同

○突目の薬　五十六丁メヲ

○目薬　龍脳散名方　同

○目の薬　秘傳　同ウ

○小児通睛の治方　同

○眼胞腫血滞て痛つよく真分膿氣ゆる眼を治す　五十七丁メヲ

○眼胞腫の薬　同

○睡起眼目赤く腫を治す　同

○目俄 昏暗なるを治す　五十八丁メヲ
○爛眼風眼瘡瘡の眼れ薬　同
○偷針眼の治方　同ウ
○眩暈ゆべき秘方　同

みの部

○耳のうづく時の薬　二方　五十九丁メヲ
○耳の痛む薬　二方　同
○氣虛し耳聾膿出るを治す　六十丁メヲ
○風毒耳ふさがり熱し胸ゆ痰ありて耳聾頭重眩暈するを治す　六十丁メヲ
○耳より膿出るを治す　二方　同
○停耳の薬　六方　六十丁メ
○耳中より血出るを止る方　同
○耳の鳴を止る方　二方　六十一丁メヲ
○耳の中へ竹木刺立るを治す　同
○耳の中へ諸蟲入るを出す　同

○耳へ蟻乃入るを治す　六十二丁メウ
○悪くゑを飲を呑るを下す丸薬　二方　同
○水に溺死しるを甦す法　二方　同
○ゑに溺しるも縊るをも救ふ法　六十三丁メウ
○ゑに渇せざる薬　同
しの部　腫氣小便通ぜざるせの部に治法あり水腫脹滿すの部にあり
○蓐腫物貼薬　二方　六十四丁メヲ
○腫物を一処へよする薬　同ウ
○一切の腫物痛を止る円薬　同
○腫物抱らし薬　同
○腫物押薬　六方　六十五丁メヲ
○腫物乃膿をぬく法　六十六丁メウ
○腫物あらひ薬　同
○腫物によをあくる薬　三方　六十七丁メヲ
○腫物に久く不合を治す　同ウ
○腫物に廣く破れゆくを止る法　同

○腫物を膿する薬　六十八丁メヲ
○腫物表外百二付薬　秘方　同
○腫物并瘤等を破る薬　同ウ
○腫物を化和へのくる薬　六十九丁メ
○腫物内薬　同
○同　穴瘡　一切腫れ瘡よし　同ウ
○同下〳〵薬　二方　七十丁メラ
○瘻くさり薬　同ウ

○腫物引薬　二方　同
○腫物疵愈薬　中よもよし　七十一丁メヲ
○腫物痛を止る薬　同
○腫物膿出尽るを出す　同ウ
○腫物引すへる妙薬　同
○一切の腫物よ妙薬　同
○腫物吸薬　七十二丁メラ
○諸腫物悪瘡よ瘡上ル薬　同

○一切の腫物瘡薬　もろもろを止痛止のめ薬也　七十二丁メウ
○腫物一切を治毒氣を抜妙薬　同
○腫物一切瘡薬　七十三丁メヲ
○白禿瘡傳薬　同
○寒瘡妙薬　二方　七十四丁メヲ
○鹿興癤の薬　同
○呃逆妙薬　三方　同ウ
○通仙丸寶丹　濕毒寄方　七十五丁メヲ
○濕毒よて多是瘡ふるを治す　七十六丁メヲ
○積聚の妙薬　七十六丁ウ
○積聚血塊を治す　七十七丁メヲ
○積塊を熨法　同ウ
○食傷の名方　同
○食傷振薬　同
○食傷薬　七十八丁メヲ
○食物味酸覺ゆるを治す　同

○食積胸膈煩悶するを治す　七十八丁ウ

○諸宿食を治す　同

○腎薬　三方　七十九丁メ

○屁ばすを治す　八十丁メヲ

○古臍てにを塞を治す　療治せざれバ死す　同

○古ふり血出るを止む　同

○古忽腹出るを治する方　同

○傷寒熱甚く古出て入ざるを治する法　同

○同陰症を治する方　八十一丁メヲ

○同癢て後房事を犯鼻發するを治す　八十一丁ウ

○能遅の鼽薬　同

藤井呂求子見隆 纂輯
長岡恭齋 丹堂 校正

あの部

○凍裂瘡れ薬

一栝婁根を煎じ洗ふべし

○同 あゝぎれ名やけひびよし

一冬瓜皮 乾 茄根 二味煎湯にて洗ふべし

二三度にて愈る。又白蔻細末し。先茄根乃煎湯にて洗ひ粉薬を付へし 極て

妙なり

○同

一毎年あつぎれ出る人ハ五月五日午時生姜葱艾を用て是銀を搗て一時許すべし再び發ざるこゝのあり

○赤くされ茶

一鮒の鱗　小豆の粉　白粉各等分

藜蒿蕓の汁にて付べし妙なり

○阿伽陀圓

一楊梅皮十匁　胡黄連一匁　胡椒四匁

木香　藿香　本　黄連各等

紫草根　右土氣を四味各末にし

右粉にし糊にて丸し丹を衣にかけるなり

小児ハ二三粒大人ハ十粒つゝ白湯にて用。

小児の百病。霍乱。虫。積。止逆。食傷。

舟の酔を醒し。泄瀉にハ食のゝち湯にて

用ひ高腹にハ地湯にて用ゆ

○穴痔の茶

一田螺を尖よてあぶり又温めけをかし其汁にて膽礬を焼かへし煉て穴へ入なり

○同

一合歓の木の苔むしたる皮を去七日流川に晒し黒焼にして胡麻油にて付べし

○穴くさの薬

一大麦の黄こなを穴へ入へし

○同

一烏貝黒やき炮し麻油にて付べし妙なり

○同

一燈心草根生ずるか穴を埋る程入上よりおし温むるかゝ灸をすべし。度く艾湯にて洗へべしうるほ膏薬をしてよし。疼より膿出るも此薬を用て治すべし

○悪瘡の薬

一時珍黒焼を髪の油にて延て瘡の口にいるるも薄き紙をよくく揉て其上に付へし剥れ瘡によし

○悪瘡爛治し紙きよめ方

一三黄圓

大黄　表ハ三文　裏ハ二文　秋ハ二文　冬ハ五文

黄芩　表ハ四文　裏ハ六文　秋ハ六文　冬ハ三文

黄連　表ハ四文　裏ハ七文　秋ハ三文　冬ハ三文

右三ものを粉はし丸し日に五粒づゝ三度用ひ

へし。此内黄芩ハ紙に包てあぶるなり

○内爛れ治し兼るよ付薬

一白粉　麻角　蘆甘草　小麦粉　各弐匁焼

右分量加減よハ　硫黄　阿仙薬　桂

粉末　右何も粉よし油にて煉て付べし

○あざ瘢風の妙薬

一萆麻子　白粉　かし

右等分に合せ粉よし付べし

○あざぬき薬　大こめなり

一蛙蹠の小便を切こ付べし

○中暑にて忽ち地に仆れ死せんとする

を治す

一大蒜頭四ツ五ツ皮を剥き清し路上の熱土一塊丸て蒜頭に同く研爛し汲その井の水よて白濁を去て病人の口中へ灌べし忽愈

さの部

○産前産後血証百ニよし

一延命丹

麝香　白水に一夜浸し人参　黄色よて焙き去　胡椒　三分
皮を去火を去る　紫檀　火をいむ　白檀　三分　火をいむ　丁子　火を忌花を去る
車前　皮を去の焙　黄柏　皮を去其　升麻　二分　其まゝ

沈香　二分　火を忌　木香　二分　火を忌　茜根　白水に三夜浸し心を去て焙　三分
青木香　火を忌白水に一夜浸し　大黄　二分　其まゝ刻　沈香　十四味
粉よして散薬にすべし　或い麝香少加へ蜜丸よし

○麝香金圓と号ク

て麝香金圓と号ク

○産前産後一切の病を治す　負担身よりし　一乳付なり

一神仙散

葛根　麝香　酒製　一分入る　胡椒　三分
紫檀　黄柏　酒製　白檀　升麻　青木香　大黄　酒製　よハ此一味のぞくべし　虚人　五分

人参　木香　丁子
沉香　耳茸　辰砂
右粉よし　白湯にて服すべし
○宮山振薬　産前　産後　多負　赤泉
一人参　きりとり　川芎　炒　黄芩　炒　丁子　良香　炒
熟地黄　酒に浸し竹刀にて刻む　川骨　白あり　酒に浸し　煙けを出ひ焙し　すきあげ刀にて刻む
肉桂　上皮を去り刻む　桂心　松浦肉桂の事　上皮を去刻む生にて用ゆ
右の内耳茸　桂心ハ生にて炒り　ハ黄色に炒

れうぢ　さんこ男女共ハ右味へ大黄　炒て多分に加ふ　赤身　口
目周　さるるに　大黄　多分に加ふ　強く能　上ハ百
草結かし　それにても強上ハ椒　柳子　多分に加ふ
右十六味の内ハ大黄　黄連　木香　椒　柳子
茯苓　又味　行きて　炒　多分に加ふ
右の薬用ゆる内　禁物
串柿　薯蕷　冬瓜　越瓜　零餘子
煎茶　挽茶　川奥の茶　葱の茶
程ハ皮にても家の中に置て堅いむ

右十一味を貼をなしてなり

○蘆荀催生葉

一熊胆散

當歸　川芎　參蔘子小あかひの実なり

白芷　紅花　杜丹皮各等分

右天目より七分目入好酒を三分入三分煎し。是を夜より用べし

○格秘催生葉

一芎藭胎湯　難産より用て生れずとなり

枳殼三分　乾姜　白朮

桔梗　白芷　茯苓各等

自然より一二服よて生れざる付ハ沉香をか加へ

○同

一當歸　紅花　枳殼　赤通

瞿麦子　三棱ふうつき　馬鞭草

梗の晒白茯　赤茯

右粉よし湯よても煎羅よても用ひ

○蘆荀蘆後帛一切の金瘡を撲より用ひ

一龍王湯　但家伝秘方別に授之

川芎　白芍薬　川骨　良姜

当帰　黄芪　黄芩　木香

大黄　甘草各三分　人参　肉桂

桂心　黄連　各五分　上十味

振出し一服四

○悪阻病つちやこの事

一麦門冬　茯苓　陳皮　人参

白朮　黄芩　竹茹各三分　甘草少

右煮し一服

○悪阻疼乾嘔するを治す

一人参橘皮湯

人参　茯苓　陳皮三分　白朮三分　厚朴少

甘草　麦門冬各三分　芍薬各三分

右ひんし一服四

○懐妊月数を海りて式六月より用る薬

一香附子　丈五　甘草各五　合煮し一月より七日づく

飲べしるかそり安くさまるなり

○懐姙口をくひつめ足すくミ首を垂 不二
言語汗出熱あり中風に似たり
ごとを治す

一白扁豆をかゞ炒黒してあらて用べし。焦る切交ゆ

○新産 産のけつきてるがつりをそくハ

一催生湯

肉桂 紅花 菊花 当歸草 牽牛子 各等分

煎し酒か入二三服用てをを引徐こと歩
すべし

○腰脚久痛ニ逆く生れバ

一榆白湯

榆白皮三分 冬葵子 三分 車前草 七分

右煎し用て腰を擦るべし 摑べ洗

○雑産の妙薬

一牛膝湯

牛膝 菊花 牡丹皮 各等分

右煎じて与ふ

○同

一蛇の衣を布よつて煎し。産婦よ湯を浴せて後用ゆべし

○難産奇治

一苞麻子二ツ為こきつて搗て去ぐらく よしして生る

○難産れ治法

一子を出しふるよハ塩をぬるべし。牡る引入生るべし。子足を出すよハ塩よもつやを含ふよ合足のうらよえるべし。逆子なるハ古錢四文火よて赤く焼それを酒の中へ入あつさ冷水を毋よ用ゆべし。少し碎ふかど用ゆ

一横産逆産とも産婦の古の足の小指爪乃えへぎハ円の方れすこし爪をかけ小麦粒程乃灸を三壮すべし

○横産

一産婦の右乃足の小指乃尖れ上よ小麦れ大さかどよ灸三火すべし立処よ産る

○横産逆産よて生れ難きよ

一 香白芷 壱文 百草根 弐分 粉よし

よき酒と入合ふべし

○名方 産前産後黒薬

一 益母草茎 百匁 紅花 十文目 右苧麻 陰干にして

黄芪 文目一服白湯ニ浸し 白朮三つけ土氣を去す 苔薬 文目一服白湯ニ浸し 土氣を去

川芎 文目共ニ 生地黄 文目一服水ニ浸し土氣を去 菊花 文目共ニ

右生よてかけ合一剤よして黒焼は外ニ益母葉

一年 粉はし四よて挽 四拾目 右の黒焼十五 合蜜煉

右黒薬のこ汁ハ事

一 産前ニハ食のこり湯 一産後ニハ酒ニて用

一 産後ニ脉かゝり口を噤ムるニハ三歳ゟり内

ハ男子の小便と酒と等分ニして用ゆ

一 産後ニ咽乾き胸いきゝバ米を研粉はし

か温とき用ゆべし

一 帯下ニハ酒小便湯ニて用ゆ

一 痢病ニハ飯のこり湯ニて用ゆ

一 小児の痳ニハ湯ニて用ゆ

一 出ニ男女乃氣付ニ用ゆ

○難産此薬

一 当帰 六分 川芎 六分 柚核 壱箇

当帰と当帰尾とを別にして尾は胞衣下かぬる時用ゆべし

右調合し一貼にして袋に入れ三盃半入一盃に煎じ三度に用ゆ。又散薬にしてもよし

○胞衣をひくるには

腰にてるに死したるには

子横になりたるをおし生ぬるにはよし

○産後前陰痛を止る方

一 枯礬 六銭 信子 当分 桃仁を入すりまぜ

膏になして前陰に付べし

○産前悩て毒薬を服し脳動き嘔吐

血下るを治する方

一 藍葉を絞汁一碗 急に服して即止る也

○産前小便数止る方

一 桑螵蛸十二を研て末し米飲にて服すべし

○産後血暈を治す

一 麋角灰に焼火毒を出し細末し臺便にて服すべし

按ニ産後虚火載血ヲ上行スル故ニ血暈スルナリ此方行レ血ヲ極テ快シ

○産前産後に負接骨何ともよし

一万病圓

右三種黒焼にして用ゆ

○産前産後感冒咳嗽　霍乱　其外

紅の知れざる病多く陰茎一服かとて

湯にて用

一坂井反魂丹

右せ麻　陰干にして十五　黄柏　右五　内十五　黒やき十五　香いる

六月十八日こうり

小麦粉　拾五

○産中黒神散

一黄柏　右焼　根殼　生　天花粉　各

右粉にして酒にて用ゆ。産後血のとるよし

男女の脱暈によし。耳鳴るよハ湯にて用

切疝にも湯にて用ゆ

○産後胞衣もつぐるよ用ゆる方

一鳥獸の茶碗　粉にして　右麻　黒やき　各等分

右酒糟と煮て練りかきたて用ゆべし

又雞產胸出よるも妙也

○同

一榆白皮　肉桂　冬葵子

甘草　川芎　紅花　各等分

右六味粉末にして服すべし胞衣忽下るなり

○產後惡血多く下るよ又手身金瘡

血止よ妙なり

一竹葉湯

苦竹の葉　失笑散と云　雞冠花　莖花と葉と云　各等分

一貼ずつ一貼ずつとつて用ひべし

○產後兒枯痛を治す

一當歸　川芎　白芷　藁本　木欒子

北皮　各等分　右つゝのごとく煎用妙也

○產後振慄

一人參　卵と云　肉桂　丁子　卵と云　藁と云　檳榔子　卵と云　上皮と云

藩蓬　卵と白ゑよ陳よくあゝひ竹小刀よて

刻こと日ゑ干に殊をいひ

車前子　少こ煮貼よ包む

產後よ血多く氣を失ふよはし

産後よすくこころふるふよし
目眩ふるひ目を液ハし氣を失ふよし
手身又ハうき而うり落うるよし
○産後の氣付

一生神散

蒲黄　人参　耳草
右細末して耳うき二ツゞつゝ用ゆ

○同血逆氣付

一茜根　芍藥　川芎
人参　蒲黄　葛粉
右粉よし何にても用ゆ

○胞衣下らぬ時

一天南星を粉にしてくゝ飯におしませて
産婦の足れうるを付てくべし立処
にとるなり若とりて割の内をとりこる
ハ右の薬を其人の坎へ付て立べし内へ
引入らるゝ妙なり

○産後陰破れ腸出るを治す

一象牙を粉末にしてくろやきにして
胡麻油にて付て用ゆ

○産後腹痛に妙薬

一梅干の味噌のごとく煮じ用ゆ

○産後産前頭痛眩暈不食氣虚弱の症に用る奇方

一清心散

香附子白ゑ三浸する一味　香附子砂に浸す一味　右三色ともに等分粉にして五拾匁

陳皮白朮黄柏生黄色物　各匁
茸草生　牛角十匁鰓よてれろし　以上
粉にして地黄にし。十五粒ゝ二十粒ゝ白湯
にて用ゆ　此方産後に用て効を奏すること数十人也

○産後に乱氣にして狂を治す

一青代黛　四物湯に加へ用ゆ妙なり

○産後水腫治方　産後の水腫に煮の石腫の治方を用れハ悪しきあり

一調經湯

没薬　琥珀　桂心　肉桂　各匁

細辛 又分 麝香少別にすべし 以六味細末し
生姜の煎汁に酒少加へ一度に茶匙服
かど粉茶を入かきたて一日三四度与へべし
又産後の乳乳よも以茶効あり
○産後腹満治方
一芎藭 芍薬 牡丹皮 各五
延胡索 牛膝 各三分 右六味細末し糊
にて丸かどに二十粒づゝ白湯にて用
○産後脉散乱し眼を見かへし面色

身骸冷えるを治す
一蘇枋 二匁 煎じ汁にて 人参 各五
茸茯苓 かし粉に用べし已に死せん
とするに与へ之 仏乳を正しくす
○産後に種々面赤ありて譫言 寒熱 注
来 戦慄 面色或は青く或は赤くなり色
々に変ずるを治す
一芎藭 川芎 地黄
芍薬 名 黄芩 二匁 人参 各五

雜病証とゝ定て右の方を加減すべし

一血虚して腹痛するハ藁本桂心を加ふ

一感冒目暈する秦艽拈蔓根を加ふ

一発熱して寒する雜ざるに黄芩山梔子を加ふ

一身重汗出るに白朮茯苓を加苟薬を倍す

一産後に脉浮数なるハ柴胡を加黄芩人参を倍す

一頭痛して脉弦してそゞろ寒く瘧の如くなるハ防風羌活を加ふ

一血逆上胸腹痛塞ハ延胡索を加ふ

一月水渋頻数ハ苟薬を去二分倍す

一月水来んとして腹痛ハ枳殼木香苦楝子を加ふ

一虚労して氣弱ハ人参を去倍桔梗を加ふ

一咳嗽して喘急セバ枳殼甘味子を加ふ

一痰多くてハ黄芩を去部分倍

一痰多く黒大豆の煮汁のごとくなるに黄芩とまし黄連を加ふ

一月ものたまり来ハ或ハ進或ハ遲きを兼て柴胡苟薬紫胡黄芩紫胡苟薬名各分二

ちんじ用 産熱退ぞ 産後四物湯を用
一婦人の血積よハ 藍末 三稜 于漆を加へ
一膿乳あるハ 枳實 茯苓を加へ
一産後の痢よハ 黄連 各半分 烏梅 三分 加へ
○産後小便覚えず出るを治す
一雞糞 黒焼 乾膠よ酒よて用
○産後大便結せバ
一桃仁 桃柳子 紅花 牡丹 各分 末 用
○産後頻よ他淫を治す

一白朮 漂皮 人参 各分 蒸し用也
○産後ふ腸出ずく治ゝざるを治す
一口ゝ竹の葉とひ孫の乾茎と藍じ洗ひて
丈信ふと 白礬 ふと粉よし 搗りうけ ふつう
よ 押入べし
○産後玉門傷痛を治す
一蜷 黒焼 黄柏 各分 粉よし 切こ付べし
○婦人一切の血証 茱
一川芎 大黄 白朮 名分 真茱

香粉よして茶一服かどづよき茶をつく
日よ三四度ばかり用、氣力よくなりて毒物
なり

○腰中よりおちる茶

一 茴香 枳殼 各等分 粉よし 二匁
多一盃入半分ほど煎じ服する時酒かし入

○產月を延す茶

一 生地黄 茶 各等分 粉よしうすのり
よてとき丸をもて香の前へかけ丸れば延る

丸さ大よ分べし延しうくハ長ますくなり
三四十日延る又生れ兼るよハ此茶を長の
仙の大指の先ようり爪先までぬるべし其
まま生る此茶よて生れざるハ療治しが
たし此茶よハぬれハあしぬる時分
大事なり

○ざくろ虫ぬれ茶

一 消虫散

素根 木の方へさしる根ぬ 烏賊焼 素皮 木の方ハさしる根ぬ皮をうらうらやき

石蕻　ろうやき　　椒　柳子粉　硫黄　各等分

明礬　広地　すて付　火よてあぶるべし　浸よ

研よて洗ひととすべし

○山椒よむせるを活す

一灰をかしにへ入へし忽止るなり

○酒の醉を醒す

一椒の皮を黒焼よし糊よてねし玄醉する

附三粒かしのむべし忽ちさめるなり

○同

一生麩よ塩を付て食すれハ醉醒るなり

又縮砂もよく醉を醒す

○砂糖蜜を煉法

一白砂糖　十斤　但壱斤ハ弐百匁なり　水　十斤

肉桂　七匁

右三色蒸じ十又斤よ次さきよ、れ古酒

壱升入て蒸じ次よ雞卵　七ツ入皮を去蒸

拾三斤よなる附て嚢よて濾し澤を去

又かけるなんじ煉附蜜あまり濃げれバ水を

加へうすけれバせんじつめてよし

○又方

一 白砂糖 を升 水 を升

煮し 能 時分よ 雞卵 十 へのろくする 時

家鴨の卵 をツ 入れバ卵皆一面へ浮るべし

それを濾し去 用ゆ

或 伺て曰 古酒ハ八合升 入てハ 卵ハ 八ツ

升 よし

○砂糖蜜 目利の事

一 水 多ハ泡 多し。泡うせるやうに陽煮し

てよし

○ 同上 製煉やう

一 白砂糖 を貫目 水 を貫目 合 弐貫目 迄

煮 を を貫七百目 よ 煮ず

○ 同上 製煉やう

一 砂糖 を貫目 ろ 百目 入 煮 を を刻 き

煮 ゞ 減 すべし

○ 又法

一氷砂糖　壱貫目　乾　壱貫目

右の円へ陳皮　十五　生姜　十五

粒胡椒　三五　雞卵　四つ白を　葉茶　六五

右六品入て砂糖の香をさる

〈きの部〉

○氣付

一寄應丸　小児ニ用て効あり

人参　壱五　沉香　壱五　熊膽　弐匁

龍脳　弐五　麝香　六五　金箔　十八枚

右・色かとよ丸〜金箔を衣とす

○氣付

一神氣散

人参　壱五　雄黄　壱五　葛粉　六分　朱砂　少〜

右粉よ〜て長秋八水　冬春八湯よて用ゆ

○同

一至寶丹

人参　壱匁　蒲黄　弐分　辰砂　弐分

右細末〜蜜よて煉○色かどよ〜て一貝

なり。已よ既朝と見ゆるよも用て救へべし

○同　金瘡目運そうけあるよ用て妙なり

一人参　五匁　藩蓬　五匁　熟地黄　共ニ　桂心　共ニ

当帰　酒製　肉桂　共ニ　牡丹皮　五匁　川芎　五匁

白芍薬　五匁　酒ニ浸し黒焼よす　甘草　五分　以上十味

調合し黄色よ炒て一貼七分つ煮て一度

蒸し用ゆ

○同　今ハ赤薬秘方

一人参　十匁　辰砂　五分　桔梗　五分　甘草　五匁

茯苓　五分　菖根　五分　宿砂　五分　麝香　五分

右細末し白蜜よて煉用ゆ

○熱あるよハ葛水よて用ゆ　○傷寒よる

生姜を入蒸し用ゆ　○胸よ熱あり吐逆

セバ縹柳花　獨活を加へ煎して用ゆ　○

産後腰よ熱甚よハ海藿を煎じ酒とか

加へ用ゆ　○胞衣ちぎるよも用ゆ

○同方

一辰砂　弐匁　黄連　人参　茯苓　丁子

梔子　車前草　各　龍脳　熊柳子　各七分五リン

右細末し白蜜よて煉烏蛇　白蛇の二味

と加へるるあり其時ハ辰砂四匁入べし

○灸のあと久しく愈さるを治す

一靜血散

沉香　黒焼き　麒麟竭　阿仙薬　白粉　三分

右粉末し　摔　分べし

○灸の食かぬるを妙薬

一多数を經へる紫深丸絹きれを粉はして

表まで灸を分れバ癒る妙なり

○灸年膣物食薬

一明礬　焼かへ　辰砂　よても朱よても　捻りくべし

○灸の穴骨へ通りるを治す

一土器　能粉　よし　雞卵　よてねり紙を厚　分て

張べし。穴も消　痛止るなり

○灸あつるね法

一上茶　大　白粉　大　信子　中　黄柏　かし

右粉末し　分へし

○灸は愈薬なるを治す

一雞卵を法ゞ黄かぶ面を付べし。かゝる間は癒べし。又相の薬を付るもよし

○灸なとり薬るよ薬きなとるぬを療

一兎の毛を焼て付へしゆゑなり

○灸のあとつゝぬ法

一生姜をうすくへぎ煮て充分くすべ

べし。ゆつゝぬなり

○灸代膏薬

一阿膠　胡麻油を用ゐ　丹

実よて煉合すべし

○疥膿　愈薬

一白粉を焼て　粉はしかし色よき

かゞ丹をまぜ用ゐ。但大疥大膿なゞハ

いるも古き布を疥の上よしき長上よ代粉

薬をとるべし。但新疥の時代粉薬とあ

るあしく

○疥癩薬妙方

一水仙の根をすりて付へし。忽ちいやるすみ也
手疵ハ紙よりぬく ひとしほ付べし 痛云
食る也

○疵 瘉菜

一薯蕷 はをむき おろし 田蕎麦 すりてやまのいも
のまぜくすりかどすり合せ日よりて粉にして付べし

○一切疵の痛を去

一靈天蓋を焼粉よしして搗りかくべし

○落血止方 引茶 瘉菜

一石灰 二分水兎 してあと云 蓮葉 生にて 黄柏粉 云

右石灰を用ひて搗生の蓮の葉を入いるもの色
は紅かどよ搗合せ。黄柏の粉を入搗合せ。八月
八日より搗へて土器に入土より堅て用べき也獣
かこ彼りうるハ油にて付べし。又一方ゑうごと
いしゝ草をかけかしてよし

○疵癰 付茶

一牛歯 馬歯 鹿角 狼歯 牡蠣 蛤 土竜 各粉よしして

山梔子　榆木皮　石菖子赤辛螺殼
琉黄　白粉かし

右分藥の中へ三分ずつ入るなり

○百氣散　きづに付藥

一麻代家角　きつ刺　女の月ものよ出めし

七日して黒焼よし　疝のうづき痛不付べし

○疝洗藥

一黒豆　繁蔞　接骨藥
車前州　蓮藥　茂こぶ

桑木　青木藥　石菖
欵冬　右十六味等分よしして
煎じ　塩少入疝を和らよ洗へべし

○平家黄藥

一甘草を粉よし　黄柏乃粉をかしへ胡麻油
よてとき付べし

○切疝より出れときうるを治す

一丁子を粉よしてひねりうへべし

○疝の出をとる藥

一川蜷黒焼　粉よしして付べし

○疳より出るきしるを消薬

一酸漿草の葉を陰干よし　粉よしうり

かけてよし

○廣き疳潰ひやう

一蕎麦葉　牛膝の葉　ぎしぎし葉

何も煎じとも能くすりて中へ塗也。疳ぬけ口へハ

何薬ぬるとも明麻の油にて付べし

○切疳よりのまたくとを治す

○多膿脹滿を治す

一大なる田螺　四ツ　大蒜　大ツ　車前子　粉して三匁

右各研て鍋のごとくにして脇の中ゟ貼。帛

をやきよして玄べし。少頃して多小便すりト

る二三度つくれバ膿氣ひくなり

○水腫小便渋を治する法

一地龍　猪苓　紫　醋　夫　右各等分

細末し葱を入搗まぜて脇の中ゟぬり。

厚く廣さ一すんどよして絹帛にて縛

蚤べし小便多くあて愈。一日に二度易べし。
又右の葉の円へ車遂の粉を加へて尤よし
○又方
一蚯蚓糞を研。去年の醋にてねり膏にして
処に塗べし。即ち膏消することあり○
陰嚢に膏あるバ蚯蚓糞を車草の汁
にてねり軽く塗べし

一疵の口へ耳肉一すも二すもおろす事あり。
艾にて焼其後何成とも兄合葉を付べし
○疵の口ふさがりて膏るあるを治す
一萍蓬のうげかしを粉にし茶一二ゝ程湯
にて呑へし
○くろをれとて上乃皮ハ切すして骨折る、
事あるを治す　ふの粉にも一方あり
一鹿の角　黒焼　黒神三分　かいる草　黒焼
拍櫱根　各粉にし

梅の砧そく飯よおしませゆるくこのへ上よ
付紙をふさよし榆柳の皮を煮べし

○同治法

一鼠の砧のろを丸てすりて付べし

○疵をよく癒す薬

一蛤蜊黒焼 疵の口へ捻りうくべし

○疵用上薬

一ゑ葉松の皮を削り真脂をうりて紙にる
入る。日よ乾てゆるくとかやうよして。疵よ

付る時ハ鶏卵 黄をかし加へ人油膏をか
入べし。ゑ葉を疵ふくべ深く入べし。肉を上
るる奇妙なり

一人油膏

鄂 ゑ拾る 人油 拾る 葡萄酒 拾る
小麦 二三粒

右煉やう小麦浮より押つぶすよろく
と碎けるを度とし裏付乳香 九る 入うきよ
せてあぐるなり

一合歓の木 樹皮は 黄柏は
右三色 粉にくゝして付べし
○疥癬 癢て浸ゝるきを平とする薬
一黄柏 厚朴 銀屑 三味
にくゝ飯に押まぜ付べし
○疥口付薬 うづきをとめ よくいやす
一昆布丸
駿馬のくゝ歯 三枚 昆布を巻こゝ包

一日一昼焼 細末して付る
○疥廻り熱あるを治す
一牛膝の根を揚て切こ引べし
○疥を内より癢す薬
一女の髪の灰 黒焼 鳥の黒焼 麻子の黒焼
蘆盆子 菖蒲の葉の黒焼 各等分
但 鳥は一倍入てよし。酒にても白湯にても用
○疥 百病膏
一赤小豆 拾袁 石灰 七日ゟ乾し 天花粉 七日ゟ乾し 各袁

牡蛎 七日ゟ五日迄しやく焼 袋角 三ヶ
藁蕨蔓の汁よて○芒硝よ吹ー茶を衣ー
かけ蚤。粉よして付
○疳よく癒す薬
一鱔魚 黒焼 疳の口へ捻りかくべー
○疳癰の薬
一寒水石 焼三 滑石 生一
右粉よー捻りうくべー
○同

一擂の煮汁よて洗芭蕉葉を乾はし
て油よて付へー
○疳の腟痛を治す
一天南星 石灰 等分 粉よー
きぶき研よて付べー
○同熱よて痛を治す
一生姜 天南星 等分すり合付へー
○含瘡 歩撲 弟二 牡蠣よ用る薬
一石見川 黒焼 人参 七分 車茸 生七分

右粉よし酒ゝ童便よて用ゆそりけよハ
小便。上焦ハ酒。中焦ハ砂糖。下焦ハ湯
よて用ゆ。血崩よハ水よて用
○氣上ゆ 牡丹皮する用薬
一人参 沉香 紫檀 黄芩 丁香 各等分
右つゝのごとハ煮じ用ゆ。又粉にしても
一切身よハ酒よて用 一血の証よよし
一氣付よハ湯よてもあるよても用ゆ
一產後よ胞衣を下すよよし

○木竹身よ立を拔薬 内薬
一三葉ゆ楊盧 梨葉 柳の葉
右何きも陰干よして粉よし湯よて一日
よゝ度ずゝり用ゆへし。飲ちぬけるなり
○同 拔薬
一麦門冬を粉よし付べし。ぬけるなり
○同
一當れ古を乾よし。物の立るる上よ口をあ
け。廻よ貼 其紙の上よ何度も引へし 柳

の酢にて煉て付へし

氣欝し食つかへるを治す　婦人の癖よし

一香附子　百目　茯神　陳皮　乾姜　共に

粉にし蜜にて煉用

○きれくさの葉

一男か女の髪毛焼女か男毛髪の焼灰

にして付べし

○切くさの葉

一鯛の骨　山梔子　白粉　少し

宮髪の油にて付べし。其上に牛房の毛茎を

ふさにしてよし

○大人小児とも陰囊大なるを治す

一牡丹散

防風　牡丹皮　茗荷　粉にし

白湯にて用ひ

○氣腫　帯に麗す。其外久き腫物を

治す

一沉香　丁子　南坂　共に一象白ろく　粉

川芎 各五匁　藿香 各五匁　木香 各五匁一名白木香 つけ日よかし

大黄 各五匁 製法は　牛膝 各五匁 酒浸し　連翹 各五匁

薑蘆 各五匁　撓茶 各五匁　山坂茶 空腹　各細

きし山帰茶 八十目　二週分　煮しぼる用

右乃粉茶 四拾二貼 一日に三貼つ 山坂茶

のけて用ゆ。但二週分也 自然吐逆のんあり

八味麻をかし加へ。病人虚弱に八人参加へ

右丸茶 服用の内食物

ひねの鯉 冬　河豚 参　串鮑

大根 陽煮して　塩か

右の外八何ても用ゆ通り次

○虚損を治す

一十全大補湯 又黄芪建中湯 に

一上丹五臓飲 五臓を養ひ不足を補ひ栄衛を調へ

目を明らかにし心腎を強す

人味 十匁　兎絲子 三匁　肉蓯蓉 三匁　杜仲 三匁

山茶 二匁　防風 各匁　牝蛎子 各匁　枸杞子 各匁 二分

柏子仁 各匁　白茯苓 二匁　遠志 各匁

右粉にし蜜にて丸し空心に塩湯にて

用也。氣虛よハ色よ脹る薬なし

〈ゆの部〉

○夢よ精をとるを治す

一乳香 一塊 栢指の大さごとく 即時よ

細よ嚼合三更よ至く嚥下る三服こと効あり

〈めの部〉

○血眼洗薬

一黄連 山梔子 蔓荊子 悪実 蒺藜 中 黄柏 中 菊花 大

白礬 大 青葉 大

右細合して煮て薬汁より大包よして水よて

さいくと漬し晒布のよ拭よて目の内

うり頻まて洗へべし又眼赤く痛よ鯉

魚膽汁と點べし或ハ竜脳と加へるもよし

目洗ひ薬

一荊芥 苦薬 黄連 桃仁

白礬 膽礬 麒麟竭

右一切の目乃洗薬鉢よ爛眼よ妙なり

湯にて煎じ洗ふ

○同

一 明礬 焼 白芷 茶色

右粉にしかつてあらに入洗ふ かすミ目

病目 血目 たれ目 上氣目 昆布何色

の目にもよし 口内ハ 膽礬を粉にし

すこしまぜべし。かすミをとり用ゆ云

○目洗薬 乱眼 やミ目 血眼にもよし

一 枸杞 黄連 黄柏 各等分 沈香 等分 桔梗 なり 細末

右布袋に入濃煎じ胞の上より下まで

さいく塗目の中へも時々入百遍袖も

洗へし効あり

○目洗ひ薬

一 大黄 黄柏 黄連 枸杞根 各等分

水に浸し洗ひてよし

○目薬の方

一 黄連 八五 苟薬 三ト 青仁 三ト

防風 三ト 山梔子 三ト

右粉末合入天目に一盃に煎じ絞て数

返よく漉し。一盃よ煮しるを炭火よて湯煮
よし 熊膽二朱入 炉甘石二朱 童子丸小便
よて三度焼かへし 硼砂二朱 龍脳少
右丸煉薬よてねるなり
○目薬 茶也
一竜脳 辰砂 麝香少 樟脳少
右能くすり合密よて煉寒熱ともこよし
○同

一竜脳散 粉薬なり
竜脳少 麝香二朱 鹽消二朱
葛根よくさし
右細末して摺合るなり
○同
一麝香散 和僮を散じて眼をゆうよする
麝香少 竜脳少 烏賊骨少
右三色よくくすり合てよし
○同

一辰砂散　粉薬也

辰砂（水飛）　硼硝　竜脳　寒水石（土器ニ入古の薬ニ〆ふせて粉ます）

○冷目薬　他　老眼よし

一開元錢　胡椒　牡蠣（焼き）　青葙子（焼き）　硼砂　青貝（焼き）　艾　赤塩　硼硝

又竜脳かゝ加へ古ふく細よしてよし

○目ぬ内薬　冷目或ハ血のきりぬ眼よし

一菊花　川芎　茯苓　人参　茴香

石解　柏子　防風　沉香（各等分）

肉桂　黄耆　山薬（各等分）証ヨリ大黄加ヘ

○明眼地黄湯

一菊花　茯苓　石解　大黄　人参

棗寄生　柏子　肉桂　黄芩　沉香

鬱金　川芎　地黄（各等分）　甘草（加ヘ）

右せんじやうのごとし

○目の内薬

一大黄　香附子　罌　菊花（別ト）　茯苓（別ト）

川芎 乾姜 細辛 耳茸 黄柏 牡蠣子丸葉 訓下ヲ云フ

右九味煮〳〵用ル

○眼目内薬

一忍冬 南天 人参 川芎 桔梗 枳殻 枳実もよし

大黄 菖蒲 車前子 耳茸 右ノ煮〳〵水七盃ヨリ一盃ヨリ煮用ル

○目へ物の立つるをぬく薬 目へ物の入るを出する智恵あり

一芒ヨハヤの新丸実の根 其外一切の物目へ立つるをぬく付薬を瞼の上ヨリ。其後蟬をすりて入べし

○突目の薬

一蘘荷根汁ヨて唐墨を研塗ル 男ヨハ女子の飲乳を入。女ヨハ男子丸飲乳を入。右三色合眼中へかさすべし。赤目ヨもよし。牛馬のつき目ヨも効あり

○目薬 龍脳散 名方

滑石 石膏 寒水石 各焼 五分 硇砂 樟脳 七度焼 辰砂 水飛 各一分 龍脳 七分

右七味細すり白蜜にて煉。一剤目にさすべし

○目薬 秘傳

一藁種の芯を三月三日の暁よりすりて石菖蒲の葉を刻入て陰干を水入て煮。目に塗べし

○小児通睛の治方

風熱肝をやぶり魂目に應ぜず風邪黒眼をふさぐゆへなり

一犀角 人参 茯苓 遠志 各一分

龍脳 黄芩 各 麝香 耳茸

水煎し用 按ニ通睛普濟方ニ云小児誤テ跌或ハ頭脳ヲ打撲レ驚馬テ肝系風ヲ受ルトキハ瞳人正シカラザルヲ致スト云云牛黄平肝ノ薬ヲ服スベシ

○眼胞腫血滞て疼つよく甚水膿乳のる眼を治す

一大黄 当帰 木通 升麻

黄芩 川芎 黄連 連翹

右ゟ煎し服す

○眼胞腫の薬

一朴硝を銅器に入熱湯にてうすく解き洗へし

○瞤起 眼目赤く膣を治す

一瞤起に眼赤く膣良久して散るのあり。此血熱に因て肝とき肝に帰し。起るときハ血散ずなり。黄芪を搗て汁を丸。糯米六合を此汁に浸して蒸乾に。よかくのごとく三度して後。磁石にて湯を沸し。右の黄汁にてこしらへる米を四五匙かど入薄粥となし。温かる内に半飽かど食して後。此粥の湯を一二盃飲て即睡べし二日にして愈るなり

○目俄昏瞶 なるを治す

一十二月に乾る桑葉枝にありて地に落ざるを採湯に煎じ眼を洗へべし即愈

○爛眼風眼瘡瘡の眼丸薬

一青仁三粒去皮尖を搗爛銅緑 黄豆丸大さかど加へ能〳〵研て生汁の新く細なるに果芋の多一盃を器に入薬を浸し半時かど置く多の色緑なる時に一日に度〻眼を洗へべし

三日の後自癒るなり

○偷針眼の治方　めがさを背の紅點をやりて治すること鍼灸聚英よんでしる

一左よめがさ出れハ右の中指の本節を紅線よて志らと繫べし。右よめがさあるバ左の中指を右のごとく繫一夜そのまゝよ置ハ即癒

彙聚單方

○瞎暈よ用ゆべき秘方　見へ

一麒麟竭　蒲黄　人參　各等分　沉香　各少　辰砂　研て末にす

右粉よし白湯又ハ水よて用ゆべし。多ハ甚人の泥よるべし。云病の人よハ妄よ用ゆべ〻沢。なよ負の瞎暈よよし。或ハ氣を労し。退屈するよ甚を用て氣力をつよくす

みの部

○耳のうつく時の薬

一榎木の葉を石ゆ一滴耳の中へ入べし。忽ち治るなり

○同

一鷺の根　鶴雛根　南天の葉　各等分焼し
かゝの油にて和し温く耳へ入べし

○耳の痛に妙薬

一鷺根　くろやき　麝香　かゝへ油にて付べし

右停耳によもよし

○同

一冬葵葉　世俗小葵これ
搗絞て汁を耳の中へ入てよし
又つゝの葉を煎りて汁を入て効あり

○解倉飲子　氣虛し耳ふさがり膿出るを治す
一白芍藥　当歸　大黄　甘草　木鼈子　甘草　一味

右せんし用　四

○辟毒　風毒耳ふさがり熱し胸に疾あり
一辟角散　て耳聾頭重眩暈するを治す
辟角　前胡　菊花　石菖　枳殼
澤瀉　木通　羌活　麥門冬　忍黄
各等分　耳菊少加へ煎じ服す或は粉はし
施湯にて用ゆ

○又方　耳より膿出るを治す

一龍骨　赤小豆　烏賊骨　各等分

目茶のごとく粉よし　椿の油よて耳へ入よ

○又方　耳いたみ膿出るよし。膿出ざるよよし

一香附子の粉　耳茶丸粉とかし加へ鶏の

そうこうを煮じ。其汁よ入るく解て

耳の穴へ入るし入る。奇効よ痛止るなり

○停耳の茶

一桑螵蛸を丸焙粉よして麝香とかし

入て耳へ吹入るなり

○月

一谷川の解虫　ささみをうり絹よてこし胡麻の油よてこきかし温め石菖のみよて痛方を上へてなで付べし

○同妙方

一猫乃糞　黄柏　生粉よ一一

胡麻の油よて入べし

○同

一香附子　細末し紙をひねり和うよして右の粉を付耳の内へ入て忽ち効あり

○目

一鰯の灰を黒焼よし飯粒よ押まぜ耳ざれ出る人の耳へ付根の外よりぬべし

○耳中より血出るを止る方

一耳中より俄よ血出ることあるよ龍骨の末を麦よて耳へ吹入れハ即止るなり

○耳の鳴を止る方

一耳鳴て晝夜流水の色を聽ごゝ又ハ耳の中癖者よ烏頭を黒焼よし石菖根と等分粉よして綿よ裹耳の孔を塞べし

○耳鳴よ菖蒲　松脂

一巴豆　山椒の肉ハ實

右等分よして真綿よ包耳へ入べし

○耳の中へ竹木刺たちゝるを治す

一雀屎　臍　男よハ女のそれを女よハ男のそれを乾ゝるを用

右二色鮫よてたゝしやまゆよ包ゝ胡麻油かゝ色刺ゝる耳へ付酒を辟ゞ飲て寢べし忽ぬるゝ妙なり

○耳の中へ諸蟲入るを出す

一生韮の汁を酢と合て耳へ入べし

○耳へ蟻の入るを治す

一穿山甲焼て粉にし水にて解耳の中へ灌入べし

○ひるを呑こむを止る薬

一食酢を呑べし骨吸る也なり

○同

一山椒の實をぬき捨て丸なゝ呑べし

○水を飲死しむるを蘇す法

一其人の足の指を屈伸をしてんるへし

屈伸の水を口に含て鼻の穴より吹へし。ゆるをのづゝ七孔より出て蘇るなり。大指屈伸なさるハ活るなり

一急に死人の衣帯を解さり。脇の中より灸すべし則活とゝ

○同法

一皂角を搗て綿に裹て納むれば須臾にして水を出して活るなり

○ろよ溺るるよも縊るるよも

一雷夏を粉よし口へ吹入へし。耳鼻より

ろ出るく魅るべし

○ろよ渇せざる薬

一烏梅 三匁 塩白梅 三匁 葛粉 三匁

麻荳 三匁 薄荷 三匁 何首烏 蒸て刻て 三匁

甘草 三匁 石細末

白蜜よて○毛孔よりし一粒つ用ひし

しの部

○彩膣 拘 貼 茱

一蛇骨 蛤殼 古き を用 牡蛎 古き を用 靈天蓋

桐の木 黒焼 各等分 赤小豆粉 麝香

右各粉よして日膣よハ胡麻油よてねり付へし

癰疔の潰るるよハ糊よ押ませて付へし又ハ一切

膣拘よ醋よても藥蕻の汁よて

解て引なり

○同

一苦参 苧麻根 指蕻

志のね 和大黄 雄黄 黄連 各等分
粉よし 合胡麻油よて付べし

○膣拍をもて和へよする薬
甘百合の根 小豆の粉 ませ合
膣拍のよせしき和をあけて廻よ此薬を付へし

○一切の膣拍痛を止る円薬
一大八茅大 大蟹中 麝角中 沉香 焼かへ
右粉よし 酒よて服す

○膣拍ちらし薬
一熟冬の葉を冬ちりて陰干よして細よ末し
和泉砂よてゆるく解 鳥形よて幾度も引也

○膣拍押薬
一百草霜 焼ハたべすを土器ニ入 塗こめて焼 細よす 葛粉 二色を
粘よ おし合 拍手の内を へくよくかきまぜ
膣拍乃まわりよ付て紙を付るなり

○又方
一蓼蘭 のすやきも古のごくはして付る也

○又方

一天南星黒焼 馬酔木黒焼 黄栢各等分
白粉かし 粉よし 藁蕓の汁 米の酢等分
よく合て膏の油ろよく付。赤く腫痒時ハ鳥の
羽にて加くひくへし。又粘を梅砂にてこき膏
うるまろよく付るもよし。蓋ハつるのこく粉
紙と付へし

○一切腫物押薬

一楊梅皮 粉よし 白粉か 黄蘗 粉
右粉よし 藁蕓の汁にても梅の砂にても
又米の砂にても付べし

○又方

一蔓椒の若葉を陰干よくして粉よし。天南
星三分一入て梅砂か米の砂にて付へし

○又方 三下散

一黄栢 赤小豆 榆白皮 山梔子 黒焼
右等分に合梅干そくいにて押合膏物丸過
よく付。上より引さき紙を付べし。若押薬をそ
つ破るあらバ胡黄連を加へ付べし妙なり

○膣内乃疣をぬく法

一牛角　黄柏　生粉　蛇脫　あぶる

青木香　赤小豆　生粉　各等分

一以ごとく糊よて丸め膣内口へ入てぬくべし

○膣内あらひ薬

一熊笹　藜蘆　車前子　蓮蕊　蓮錢草

右等分宜よく蒸し焙かへ。和ら炒りのよ

てそろくと法ひ多けのかしもかきやうよ

ぬくひ。あとへ愈薬を明礬油よて付へし

○膣内よりをあくる薬

一蠅の頭　セツ　巴豆　二ツ　うすそく　籾

よませて付べし。一時ばかりして膿出るなり

○膣内よりをぬる法

一瘡諸瘡破れざる内よりハ麦麸子一粒新汲

水よて呑下すべし須臾して瘡口那破る

なり。如雨處よりを破らんと思ひ丸粒用ゆ

極験あり。又白丁香唾よて粘し膣内の

口をあげんと思へ不へ付べし甚妙なり

○膿拍ニ久く不合を治す

一而瘡ニ久く不合者ハ露蜂房 蛇退皮
乱髪各黒焼よして細末し一度ニ一匁づく
服すべし

○膿拍ニ廣く破れゆくを止る法

一椿柳子 大蒜 木香 川芎 東茅
各そなへ共色こゝも黒焼よして黄牛乳
糞を陰干よして一倍加へ麁し。又聰る
の糞を黒焼よして右の薬乳三分一加

へ練ってうすくいよおし合せ砕をか
加へ破れ入る和へ付へし

○膿拍を膿する薬

一小角豆の莢を粉よして萍蓬よてね
やし付べし。膿なゝ

○膿拍其外百付薬秘方

一天南星 生よて 麻角 黒焼 胡椒 生よて
右三味そくいよ押まぜ泡べし 効能 泡抜

一膣抱いまゞ膿ざる者よ付れバ多愈る
一小児舌のよ抱出るよハ黄のうらよとる
一食傷よハ脇の上よ貼べ或ハ吐或ハ泻して愈る
一霍乱よて氣を失ハよ脇の穴をとるべ
一虫歯ハ痛の上をとる
一婦人脇の冷るよ張
一婦人乳のれるよ注べ
○膣抱并ニ痛者を破薬
一天南星　砒霜石　明礬

右粉よ丶針を立針の口よ付へし。ま日をとるさるよ口あくるゆなり
○膣抱を化和へ此くち法
一草麻子油　耳垢の粉　二味練合せ膣抱
よハ押薬を付ゆんと思ふ和よ針をあさく立。針口よ右の薬を付れば自よるなり
○膣抱内薬
一檪木皮　金銀花　連翹
黄芩　独活

右せんじやうのごとし

○臈梅肉菓　宛齋　一切臈　齋よし

一烏蛇　酒よつけて骨を去て用ゆ　麝香　沉香　木香　薫陸香　乳香　丁子　牛麻　連翹　大黄　皮をいむ　白芷　獨活　黄芪　一名地榆　耳菓　川芎　桑寄生　宮粉よし一日よこ夜ゑ湯よて用ゆ。なを

ゑるよる熊膽を引へし。　禁梅　串柿　蘇子　川奥　油氣　螺　虻蝱ノ人ニハ用ルニ心得アルベシ

右せんじやうのごとし

○臈梅下し菓

一大黄　蕎麦粉

右粉よし三貼よして胃と荻中と荻内と三度よ酒よて用ゆへし　梅ニ此方脾胃弱キ人ニハ用ユベカラス

腸よりよの臈梅よハ川芎を去て加へくよし

○同　祕方

一 又八丸 麝角 大須蟹 香ゆを 沉香 赤ゆを
右粉よし酒にて用ゆ。麝よりよしこれハ巴豆
を人ようり七八分つゝも加へ其時ハ沉香を去

○癤 くさうり藥

一 白蘞草 陰干 粉よし 葛の粉かし 加へ
粉糊よまぜ合付べし

○腟拍引藥

一 黄柏 大 石灰 大 大山椒の藥 中六月土用よりうりげかしして
右粉よしうるまてねり付べし

○万腟拍引藥

一 露蜂房 二匁 田螺 二匁 烏貝 二匁
赤螺殼 二匁 赤地利藥 三匁 牛皮 かし
蜷 二匁 土竜 弐分
右粉よし 猫手のくいをて付べし

○腟拍疵愈藥 口中よもよし

一 寶金散
紫草 粉 を味なり 血止るも尤よし

○腟拍瘡を止る藥

一 棗の木　梨の木　柿の木
右皆粉よし　胡麻の油よて付べし
○膣拍膿出るを出す
一白蛇の衣を粉よし　唾よて付べし
○膣拍引すへる妙薬
一天南星の根をつぶし一夜白湯よ浸し
よ手粉よしてそくいよて煉合丸のまのけへ
付べし
○一切の膣拍よ妙薬

一消毒奇効散
烏貝　砂よ浸し十丸　赤蓼蠃殼　砂分
耳白貝　共ら合白焼粉よし
右研よてねり合付へし
○膣拍乃吸薬
一榆木あまたで　巴豆　皆分
著穎よて丸し針目よ入へし
○法膣拍頭瘡よ効上の薬
一七月七日ニ蛇脳ふとり陰干よして粉よしう

よそくいて用し。葡萄を蒸し其汁をとて用
又酒にてもよし
○一切の膿抱瘡薬 をきりを止。義上の妙薬
一白調散
天花粉 水花 天南星 内 葛粉 内 香芎分
粉にし明麻油にとて付べし
○膿抱一切口を開き毒気を抜妙薬
一董 に焙をかし入れて練ぐくかうるをぬり
上に紙をうるにして愈なり

○膿抱一切瘡薬
一蚯蚓 六月土用に道へ出死しうるを粉にして付へし。是を一夜愈しこと
○白禿瘡傳薬
一白頭翁根 搗くはべし一夜に愈○又
白鴿屎 細に粉にし。先米泔に酢を和ぜ
しくびを洗ひく後これを傳る色し○小児白
禿頭瘡にて髪生ぜざるハ椒の葉を搗て
絞りを塗べし三度かどにて即愈○又

黄柏 粉にすると生と　鼠糞くろやき　式倍子 香をとる

白粉 右胡麻油にて付べし　○海苔くろやき

苦葱 黒やき 煙 中合付べし　○赤瓜 新

丸薩于よし 粉にし胡麻油にて付べし　○櫻

稠毛を丸黒焼にして胡麻油にて解付る其

るいゆるまでハ乳をいむ奇妙の薬也

○樅の木汁實 黒やき 胡麻油にて付べし

○蕨の粉 百草 粉 多分水にて煉髮を剃て付べ

○石亀甲 黒やき 鯉鱗 黒焼 以二味為末

いまて練合せ白毫に付べし。薬落るよ有ら

ばたちまちまた多分落る也。度々付てよし

○寒瘡 汁 草

一蛭 黒焼 を胡麻油にて練付て妙なり

○月

一西瓜皮 黒焼にして為末にて付てよし。又西瓜

の皮を陰干にして煎じ洗ふもよし

○鹿耳瘡の薬

一苦参 大黄 黄芩 苟薬

榉木根皮　人参　茯苓　其苗
細辛　杜仲　黄柏

右●乾姜を炮し一度より文十粒づゝ一日に
三度づゝ湯にて用ひ
右の薬用ゆるうちに
蒲黄　麦麸　百草霜
右粉にし薬一服かとづゝ約久湯にて用ひ

○呢逆妙薬

一凡呢逆膈にりおるにハ加豆の實焼白湯にて

膈にりおるにハ白砂糖を飲てよし

○同

一蠟くろやき　串柿蒂　くろやき　各分
右白湯にて用ひる又柿蒂一度煎用ひる

○同

一黄連末　百草霜
右用る処にやひ各分に合薬一服

○濕毒寄方　通仙大寶丹
一鐘乳石三分　辰砂　琥珀

龍脳　少し　真珠　砂ゝ

右細〻すりて十二よかけよけ一貼の内

白朮　茯苓　各半分入

山椒　茱萸　各半

初日に　乃食椀に八盃入　六盃に煮ず

二日め　七盃入　四盃に煮ず

三日め　六盃入　四盃に煮ず

四日め　五盃入　四盃に煮ず

十二日まて四日目のごとくせんじ十二日用

用ひやうは年

久寶丹　を貼入かきまぜて交てことくく呑　長

後一日分乃煮湯を飲盡べし

伝受の事

一　白朮　茯苓　小麦　外を乃へ入よろく

を煎て黄色に成て新よしるなり

○温毒にて手足痛るを治す

一　甘草　柏葉　朝ふるを　真一粒も　散ぐるやうに

元初　煎　やうに　乃一盃三年に

右酒を盃入を盃よ[illegible]。二度よ右ヒ積よ一盃入七分よ煮ゞ寢さ法よ一度よ用ゆべし。風をひうねやうよ温ゆ外べし。毛一日分なり

○積聚の妙薬

一芦會 畢澄茄 焙て酒に浸し 温脾 鬼臼和名ぬかご 焙く酒に浸し 耳茸 訛分 麝香 少し

右用やう 好茶よ燒焦少し入搗て用ゆべし

積聚 頭風 血证 翻胃 胸出こよし 骨蒸 よハ秦艽 肉蓯蓉 加へてよし

○積聚血塊を治す

一赤茯苓 南棗 乾姜 三稜 各二兩 厚朴 大黄 川芎 香仁 牛膝 桃仁 枳殻 芸薹莫 苟蕊 戎朮 地黄 良姜 白朮 各 耳茸

右十八味煎ゞ用ゆ

○積塊を熨す法

一呉茱萸一升かど擣碎酒に浸し煮て熱きを布に裹積塊にあてゝ熨べし。冷れバ

直に易てよし此方屢用ゐ屢効あり

○食傷名方

一硫黄 鷹鳥目と云を捨る 胡椒 各等

右粉にし●毛袍にまぶして飯にて丸し一丹を以て衣とす

○食傷振茱

一枇杷葉湯 或倩に此方に眼子菜陰乾を加へて弥効あり と云云

呉茱萸 各五匁 肉桂 各五 枇杷葉 各五

莪朮 各五 木香 八分 霍香 各十

右一貼を五匁ばかり布に包み熱湯にて二三度振出し其後多一碗入七分に煎じ用ゆ

○食傷茱

一益智を味淡多に浸し一日振茱して用

○食肉味酸おびゆるを治す

一胡桃を嚼爛し生姜湯にて飲べし

五処より止なり

○食積胸膈煩悶するを治す

一青皮 七ト 丁香 五分 巴豆 去毒 莪朮 炒

三稜 三分 百草霜 去灰

右粉よして丸し陳皮の煎湯よて用 或

生姜の煎湯よて用もよし

○木香散 法酒食を治す

一木香 牛膝 白朮 各等分

粉よし 切こ用 ㊃

○腎薬

一丁子 ㊀ 地黄 古酒浸 大味子 三文

茴香 初八月三浸 後八酒三浸 菟絲子 古酒浸

附子 去皮酒浸 肉苁蓉 酒浸 二文 萆薢 去皮

山椒 四文 薬の飲やうの仕

○同 填精益氣加減

一附子 ニト 山薬 去皮 人参 去皮 分

木香 ニト 丁子 三分 萆撥 去皮

肉桂 三分 良香 分 山薬 去皮 ニト

地黄 七匁　又味子 三分　澤瀉 五分
茯苓 三分　陳皮 三分　白朮 七匁
菟絲子 三分　黄耆 三分　甘草 少し
蜜 七匁　以上十九味煉蜜とす

○四月薬　雲州ぐすりこゝ
一鶴鶉 七ツ　雀 七ツ　鶉子 七ツ
右十二月寒中よろし。各別こよ黒焼ニ
粉よし
人参 七匁　陳皮 七匁　木香 七匁
藿香 七匁　甘草 七匁

右を味づゝ粉よし　酒合す。但を貼七分ゆ屋
なり。雞卵七ツ酒よ拌　碎かゞ飲べし
四十歳以後八年ゝ二三度づゝ用てよし

○麻ばすを治す
一熊膽を穴の大さ程よ丸め穴へ入れなり
○舌臘てを塞を治す　治せざれハ死す
一蒐麻子油　紙撚よ付火を燃て裏焙よ
て舌を熏ハ愈るなり舌の臘止まで薫てよ
○舌より俄よ血出るを止む

一舌忽血をあゝ針の孔ほどくるゝ小豆を水よて粉碎汁を元く飲べし○又舌腫硬く或血泉のごとく出るゝ烏賊骨蒲黄等分炒て細末し禁つ舌ゝ塗べし即時ゝ愈

○舌忽脹あるを治する方

一雄鶏冠を刺て血を元盞ゝうけて腫出る舌を浸し後ゝ血を嚥ませ舌即縮なり

○傷寒熱甚く舌出て入ざるを治する方

一傷寒熱甚く舌出るゝ梅肉といふ上ゝ龍脳を細末舌上ゝぬりつけて即縮入る妙也

○同陰症を治する方

一胡椒四十九粒 飛礬一匁 黄丹一匁 光明丹

好酒ゝてねり合せ一ツゝ丸め男ハ左の鼻ゝ女ハ右の鼻ゝ小便道の口を緊く按少須して腹の内躁熱あるべし此時動ことなかれ即効あり。女人急速ゝ効あり 呉勉學方

○傷寒瘥て後房事を犯し再発するを治す

一傷寒瘥て后交會して復発欲死服

不レ閑不レ語或ハ熱病新よ瘥て早く起

食事をゑして復発よ中梔子三十枚

水煎し服すべし

○能逆の鼈甲

一ちやうりおて諸薬効なきよ硫黄乳香各等分

酒よて煎急よ病人よ鼈べ即止る也　萬病必愈

小兒醫療手引草　全三冊　五痳驚風疳疹其外諸病極秘ノ妙方ヲアツメ脉ノ見ヤウ治療ノ一タシ方悉ク記ス

張氏医通本草　石頑道人璐玉撰　全五冊　是本艸逢原也薬品ヲ見ルニ便利トナルベシ

薬品ノ弁　薬店ニ称号薬ノ上品下品ノ名目和薬唐薬等今日薬ヲ用ルニ薬店ニ於テ求ルニ則真偽好悪ヲ知リテ功驗アル薬ヲ知リテ偽薬不能ノ薬ヲ求メサルタメ悉ク記ス

本草弁明　全一冊　薬ノ能毒真偽等近年行ハルヽ國手古法家見識ノ發明ノ説ニ紀ニ按正シテコレヲス

薬品手引草　いろは分　全二冊　薬名異名漢名和薬唐薬ノ真偽等旭山先生松岡先生其外物産ノ諸名家ニテ多クモラサズコレヲノス

天明四甲辰年改之

大坂書肆　心齋橋南四丁目　吉文字屋市兵衛